

パリの病院

伊東豊雄
いとうとよお
建築家

パ

リの十五区にコニャック・ジェイ病院がオープンした。およそ一世紀の歴史を誇るこの病院は、当初産婦人科の私立病院であったが、ある時期からホスピスとなった。従って人生最後の一時を過ごす住まいの空間とも言える。

古い施設はそれなり街に溶け込んでいたのだが、設備が老朽化し、また病室も倍増したいとの理由から、一九九九年に五名の建築家による立て替えの設計コンペティションが行なわれた。

我々の案が採用されたのだが、ガラス張りの建築であったし、ヴォリュームも以前に較べてはるかに大きくなるので、当然の如く周辺住民から激しい反対運動が起こった。

新聞紙上で建設をめぐる賛否両論の応酬もあり、その間、市政府は確認の許可を容易には下ろしてくれない。日本のように違法でなければ直ちに許可が下りる訳ではない。討論の行く末をひたすら静観しているのである。

その結果、七年もの歳月を経てようやくオープンの際の目を見た。それだけに感慨もひとしおであった。病院のオーナーであるルノン氏と固い握手を交わしながら、私は彼との最初のミーティングの場面を想い出していた。

このミーティングでの最重要テ

ーマはファサードに関してだった。街区を形成する二つの通りに面したファサードは、いわば都市に向けられた建築の顔である。それは市にとっても市民にとっても大きな関心事である。

私はコンペティションの案を展览展示させた二つの提案を携えて会議に臨んだ。ところがルノン氏はこりともせず言い放った。

「あなたはなぜ二つの案を持ってくるのか、私はあなたの一番やりたい提案を求めているのだ」

結局、その後半年にわたって、私は毎月新しい提案を抱えてパリ通いすることになった。しかし一旦納得すると、彼はどんな反対運動に遭遇しても、我々のデザインを徹底的に擁護してくれた。七年間、我々の信頼関係は深まるばかりであった。●